

1937年度接近の火星観測報告 (3)

木 邊 成 麿 (在責)

6 月 渡邊氏に依れば、1日には描かれて居る。然し2, 3, 4日の良シ1イン
グの日には不鮮明で、少し白い部分が、ボンヤリとする程度に過ぎない。10,
11日兩日も同様である。14日には幾分白さが増した様であるが、特筆する程で
はない。所が、17日 21^h 及び 23^h のスケチでは著しく光輝を増し、18日は30°～
40° 角に白い部分が擴がり、特に中央部が白く出て居る。20, 21, 23 日の観測
では、一層なほ白くなり、28日に到つては50° 角位の範圍に達して居る(極中
心で)。一方、前田氏のも、10 日には別段北極地方に異常はないが、17, 18日
頃から廣範な白い部分が北極中心に出來、その後角度は 60° に迄達して居る。
然し、渡邊氏と同様に全體に白くは無く、火星の地肌の色が、一部に入り込ん
で居る。木邊氏のスケチも、12日迄は全く北極冠を認めなかつたのが、17日に
は白い雲様のものが北極地方に見られ、擴さは 50° 角位である。23, 25日に到
つて、その中に微かに 見へて居た黒い部分が殆んど消へ失せ、非常に白く、
60° 角に迫る程大きくなつて居る。伊達氏も、12日迄は北極地方が薄暗く、18
日には明瞭でないが少し白く、19, 20 日のスケッチでは、40° 角位の擴がりを持
つた白色部が北極に出來て居る。

7 月 渡邊氏は 6 日にスケチして居る。依然白さは強いが、少し小さくなつ
た。前田氏のも同様らしい。

木邊氏のは 2 日, 8日は依然60°角も白く、25日には少し小さく、又白さも衰
へて、割れた様に黒い部分が喰い込んで居る。伊達氏は3日, 6日に観測して居
るが、範圍は著しく縮小して、20°内外である。

以上が北極冠のスケチに顯はれた消長である。結局、4月に殆んど消失に近い
状態となり、其の頃から、極には薄い靄が屢々發生して、充分に見られなかつ
た様である。5～6 月には残つて居たか、完全に消失したか、共に明言出來
ない。とにかく、其の状態が6月15日位まで續いて居た様である。所が、6月17
日前後から、突如として、北極に異變を生じ、擴大な白雲に蔽はれた。この白
い部分が、火星面上に固着した極冠だとするのは早計だが、然し、低緯度地方

に見られる白雲と同じものでない事も明らかである。多分可なり恒久的な氣象條件の變移を物語る白雲であると考へて誤りは無からう。何故なれば、恒久的な極冠で無い記據としては、7月に入つて幾分縮少し、8月にも決して大きくない事から推定され、又單なる白雲でない事も、多くの白雲が長くて數日より同一場所を占めないのに對し、6月17日發生を發見してから以後は、縮少はしても、消失しなかつた事からして想像出来る。多分、其の下には、直接に見えては居ないが、極冠が結成されつつあつたと想像される。丁度この氣象の激變は火星秋分の20日前に當る事を附言して置く。

B. 南極冠 共同觀測に入つた當時、漸く南半球は春分前、春立ち初めた所である。然し、地球との相對位置の關係上、觀測期間中は南極は見られない様になつて居たので、充分觀測出来なかつたが、3月～6月迄常に南方に少くとも 60° 位以上眞白な極冠が細く見えて居た。一見、稍青味を帯びて見へて居たが、それは火星面の橙赤色に對するコントラスト効果と思へばよからう。

Rima(罅裂)は各觀測者とも兩極共に確實には認められなかつたが6月23日に渡邊氏が北極冠の東方に白い雲塊の如きを認め、それと極冠の間に淡暗のバンドを認めてゐるが、これは勿論 Rima ではない。總じて、今回は北極冠附近に度々大きい雲塊を見たとし、又火星表面に素晴らしい巨大な白雲や黄雲を認めたが、詳細は後章「火星面上の雲」の項にゆづる。

11. 表面の詳細 各模様 of 經度緯度の變化や、大きさ等の測定、所謂運河と云はれるものの幅、長さの測定等の整理は到底1～2年の短時日で結果の出るものでなく、又發表しても専門の觀測者以外に何等興味のあるものでないからこれ等は止して、模様や運河を今回の觀測によつてどう云ふ様子を示したか、變化の有無、色彩の檢出等につき記す事とする。説明の便宜上火星面を6區分に分けて説明します。尙緯度の方は $+60^{\circ}$ から -60° 迄とす。

第1區 サベウス灣とエリスレウム海附近 ($310^{\circ}\sim 10^{\circ}$)

サベウス灣——普通火星圖に見る如き軽くカーブした青灰色の灣で、その東端に火星面の經度 0° を示すメリディア=灣(俗にアリンの爪と稱される)が濃く鋭い入江を形造つてゐる。1935年の接近には口徑の小も一原因かも知れないが、木邊氏35浬にも爪形には見えなかつたが、今回は Seeing さへ靜かなれば15浬

～20纏の口径にも明瞭に爪形が見られ、1935年度のマドロス・パイプ形と面白い変化を見せてゐる。東側の爪はサベウスから出てゐるが、西側の爪はこれと分離して淡い太い連鎖で繋がれてゐるのを知つたのも、今回の収穫の一つだらう。このサベウス灣の南方にパンドラ海峽があるが、1935年度には淡く或は全然見えなかつた位だつたが、今回は4名共(渡邊、前田、木邊、伊達)明確に認め、しかも非常に美事な半圓形を書いてマ1ガリチフェル灣に接續してゐるのが見られた。従つてパンドラ海峽とサベウス灣の間のデュ1カリオニス地方は極めて美しく見られた。メリディアニ灣の東側の爪形の東に接して抱かれてゐる様な恰好で東西に長い楕圓形のエドムがあるがこれも白く見られた。サベウス灣の灣口から南方へ延びたヘレスポンテスは4人共認めてゐる。北方へ行つて $330^{\circ}+40^{\circ}$ にあるイスメニウス湖は、其東方に續き有名なニロ・シルチスに接してゐるプロトニルス運河と共に相當濃く、ロ1エルの如き單に圓形のものでなく東西に長い楕圓形に近いおたまじやくし形に認めてゐる。これから北方へアルノン運河によつて連結されたアレサ湖は、渡邊、前田兩氏によつて確認された。

運河——サベウス灣から北方イスメニウス湖迄の間の砂漠地方には、所謂ロ1エル派の運河が蜘蛛の巣の如くネット・ワークを示してゐる處で、東方から順次名を挙げると、サベウス灣の中央部から東地方へ走つたフィソン運河、同じ處から北方へ走つてイスメニウス湖へ入つてゐるエウフラテス運河の2本は渡邊、前田兩氏及小生によつて極く細い美しいキヤナルと確認した。アリンの爪からエウフラテスへ延びたオロンテス、イスメニウスへ延びたヒデケルの2運河は渡邊氏により同じく細いものに見られたが、小生はヒデケルを相當太く見てゐる。

アレサ湖からアシダリウム海へ延びたカリルホ1エ運河、ルナエ湖からマ1ガリチフェル灣へ延びたオタサスII、I運河は共に四人の観測者に見られた。

第2區 エリスレウム海及アシダリウム海 ($10^{\circ}\sim 70^{\circ}$)

この邊は南半球にはエリスレウムと呼ぶ大海があり、北半球には唯一つの海アシダリウムがあつて、望遠鏡裡には大シルチス附近に劣らぬ見物である。又今回はアシダリウム海の南方からチトニウス湖附近東西へ長く延びた巨大な白

雲(或は霞)が見られたので、全火星面中最も興味を感じた地區である。可愛い赤い Disc 上に上方にはエリスレウム海、下方には蟬の脱け殻の様な形をしたアシダリウム海が自轉に従つて種々に形態を變へ乍ら東から西へ廻轉する面白い様、或は東西に長く棚引いた白霧が日毎に西方に延び乍ら發達し千切れ千切れになつて消失する興味あるフィチアは、吾々テレスコピストにのみ與へられた楽しみである。閑話休題。

赤道少し北から南方に向つて灣曲してパンドラ海峡に注ぐマリガリチフェル灣はアリンの爪と共に有名で、ここから前述のカンタブラス、オクサスの2運河及アシダリウム海と連絡するインダス運河が走出してゐる。この灣とパイレ地方を中間に西方に接してゐるのはエリスレウム大海で北方へ特に突出してゐる處はオリロラ灣と呼ばれ、今年はこの灣が特に獨立して濃く橢圓形を呈し、この南方のネクタリス灣附近の濃い橢圓形の入江と共に2つの橢圓形の如く見え、大海と云ふ感じがしなかつた。それがため接近最初の視直徑の小さい頃よく西隣するソリス湖とチトニウス湖と間違つて弱つた程變つた有様を呈してゐた。この邊一帯の色彩は反射鏡には青灰色、屈折鏡には緑色の強い灰色に見えた様である。

北半球唯一の海たるアシダリウム海は、アントニアデ氏の火星圖によれば恰も蟬の脱殻の如き形を示し、しかも南端に近く突出した2つの目(ニリアクス湖)を持つてゐる。併し今年のアシダリウムは特にヤクサルテス、タナイス兩運河が濃かつたので、頗る不安定な今にも東へ倒れさうな姿であつて、辛うじて太い二本のニロケラス運河によつて引つぱられてゐる……と云ふ感じがした。アシダリウム海の南方に接するニリアクス湖は南端の尖つた三角形に近い形態で、2つの突起は見えない。この湖とアシダリウム海の間のアチリスはシーイング良好の時に20cm以上の器械に明瞭に見られた。

ルナエ湖は接近の最初は東西に長い橢圓形だつたが、前田氏はこれが2つの點の集合と分離し、又接近の終に近く、この邊一帯(クサンテ方面)が恰も氾濫せる如く黒くなり、ルナエ湖が非常に大きく擴がつた様に見られた。

再び南半球へ移つてエリスレウス海の南方に位するアルガイヤ大陸は望遠鏡裡には非常に青色が強くかゝつた白色の半圓形に輝き、丁度1935年度のヘラス

大陸を偲ばせた。これは砂漠地方の橙黄色や海と呼ばれる森林地帯の青灰色に對し眼の覺むる様な鮮やかなコントラスを示してゐた。

運河——この地區の運河は殆んど全部太く所謂ロ１エル派のものは見られなかつた。只ニロケラスが二本に見え（但しダブル・キヤナルとは別）略並行してルナエ湖へ走つてゐた以外タナイス、ガンデス、イスタ１等の比較的太い深い運河が見えた。（未完）

神戸支部例会

昭和13年1月8日18時

神戸市元町四丁目 大丸食堂にて

〔第103頁より〕

決された。

1. 會計報告がなされた結果、非常時物價騰貴等による經理運轉上の支障を補ふべく、明年度より會費の改正案が提出され、種々評議の後、賛成の動議あつて満場一致可決せられ、（年額4圓）

2. 理事欠員補充として、荏部進氏を満場一致にて選出可決せらる。

かくて18時頃、會員一同食卓を圍むこととなり、この時、會長演説に入り、山本會長により本協會の將來進むべき方針等の談話あり、やがて、有志は懇親晚餐會を開き、和氣は堂に満ち、時の經つのも忘れた。茲に各々神戸支部の發展を祈念しつゝ、意義ある時局下の總會は盛宴裡に滞りなく、終了を告げて行つた。

附記：總會開催に當り、豫てより準備及び當日の庶務に盡力されし、神戸支部幹事の方々の御厚意に深く感謝致します。（事業部）